

8月10日（日）マルコの福音書13章24～27節

「そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます。」（26節）

24、25節には「その日」と呼ばれている主の定められた時に、想像を絶するような大きな天変地異が預言されています。これは旧約聖書においてもあらかじめ預言されていることで、例えばイザヤ書13章10節では、「主の日」と呼ばれ「天の星、天のオリオン座はその光を放たず、太陽は日の出から暗く、月もその光を放たない。」とあり、ヨエル書2章1、2節では「主の日が来るからだ。その日は近い。それは闇と暗黒の日。雲と暗黒の日」と言われ、10節では「地はその前で震え、天も揺れる。太陽も月も暗くなり、星もその輝きを失う。」とあります。ですからイエス様が24、25節で言われたことは、まさに旧約の預言が成就する時と言うこともできるでしょう。

そして26節にはイエス様の再臨のことが記されています。イエス様がメシヤ（救い主）として、この地上に来られた時には人となられ、しかも家畜小屋で生まれるという想像できないようなへりくだった姿で来られました。しかし終わりの日にイエス様が再臨される時には神としての栄光を輝かせながら来られます。「雲のうちに」とありますが、雲は神の存在を現します。まさにイエス様は神として、また神の栄光と尊厳と威光をもってこの地上に来られるのです。そして「選びの民」とはクリスチャン一人一人のことですが、御使いを通して、地のありとあらゆる所からイエス様のみもとに集められるのです。その時こそまさに主を待ち望んでいるすべての人々の救いの完成の時であり、歓喜の瞬間の時と考えることができます。

ルカの福音書21章28節には「これらのことが起こり始めたら、身を起こし、頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいているからです。」とされていますが、私たちもいつイエス様が来てもよいように備えなければなりません。そして再臨のイエス様を待ち望みつつ、日々の信仰生活に励みましょう。再臨の時こそ、私たちが贖われる時であり、救いの完成の時であり、大いに祝福された、報いの時だからです。

8月11日（月）マルコの福音書13章28～32節

「いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出てくると、夏が近いことが分かります。」（28節）

私たちにはいちじくの木にはなじみがありませんので、ピンと来ないところもありますが、

パレスチナ地方に住んでいる人々にとってはいちじくの木はいつも目にするものであり、最も身近にあるたとえでした。パレスチナ地方においていちじくは、4月に葉を出し、5月から6月初めには最初の収穫がなされます。したがって「夏が近いことが分かります。」(28節)というのは、収穫の季節が近いことを意味しています。このいちじくの木のとえで言われている「収穫」とは終末と審判を意味しています。ですからイエス様が弟子たちの質問に答えて語られたさまざまな苦難は、まさにいちじくの葉がますます茂るような状態を意味していて、イエス様が語られたさまざまな出来事や苦難が起こった時には、収穫としての世の終わりが近いと悟るべきです。それは「人の子が戸口まで近づいている」(29節)すなわち主の再臨が近いことを意味しています。主イエス様が語られたことは必ず成就するので、収穫の時である世の終わりと審判の時も必ず来ると信じて、身を慎みつつ歩むべきです。

31節では「この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」と言われました。「わたしのことばは決して滅びることがありません。」というのは、イエス様のことばはまさに神様のことばと同じであるということです。ですからイエス様の語られるみことばも、神のことばとして受け取らなければなりません。そしてもう一つが主イエス様のことばは決して滅びることなく、永遠に保たれるということです。そして語られたみことばはふさわしい時に、また主のみこころにより必ず実現します。ですから、「これらのことがすべて起るまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません。」というのは、イエス様が語られたことは必ず成就し、それまでは目に見えるすべてのものは保たれるけれども、「天地は消え去ります」とありますように、天地が消え去る時が必ず来ます。

まだ起こっていない将来のことに関しても、私たちにはみことばが与えられていて、そのみことば通りにすべてが成就すると言われていることを信じ、常にみことばから真理を教えられ、それに従う私たちでありたいと思わされます。

8月12日(火) マルコの福音書13章32～37節

「気をつけて目をさましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたは知らないからです。」

(33節)

「ただし、その日、その時がいつでなのかは、だれも知りません。」(32節)と言われているように、イエス様がいつ再臨されるのかは父なる神様以外誰も知らないわけですから、すべてのキリスト者が「目をさまし、気をつけて」(33節)いなければなりません。ですから「目を

さましていなさい。」との警告が三回も与えられているのです。(33、35、37節)そして34節では、再臨は「旅立つ人が、出がけに、しもべたちにはそれぞれ仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目をさましてるように言いつけるようなものです。」とされています。そもそも再臨はすべてのキリスト者にとっては祝福された望みです。キリストが再臨される時、聖徒たちは報いとして安息が与えられます。(テサロニケ人への手紙第二1章7節)また信仰者への称賛と栄光と誉れによる報いの時(ペテロの手紙第一1章7節)聖徒の大きな喜びの時(ペテロの手紙第一4章13節)となります。そして被造物は罪ののろいから救い出されます。(ローマ人への手紙8章19～21節)しかし聖書のどこにもただ漫然と再臨を待つようにとは言われていません。むしろ恥じることなく、大胆にキリストを証しし(ルカの福音書9章26節)賜物を用いて熱心に奉仕をし(マタイの福音書25章14～30節)他の人々をさばかず(コリント人への手紙第一4章5節)、互いに愛し合うことで聖く、責められるところのない生活を(テサロニケ人への手紙第一3章12、13節)忠実に奉仕をし(マタイの福音書24章44～51節)忍耐をし(ヘブル人への手紙10章36～38節)キリストのうちにとどまり(ヨハネの手紙第一2章28節)続けることが命じられているのです。それこそが私たち一人一人のなすべき務めであり、割り当てられた責任を果たし、見張り役の務めを果たすことになるのです。

私たちにはこれほどのすばらしい報いと祝福が与えられることが約束されているのです。そしていつかは分かりませんが、必ずイエス様が再臨なさいます。その時にこれらの約束が必ず成就するのです。ですから、私たちは地上にあってどんな苦難や痛みや悲しみを経験することがあっても天を見上げ、再臨される主イエス様を仰ぎ見つつ、再臨によってもたらされる救いの完成と御国の完成をおぼえましょう。そしてただ信仰をもって日々自分のなすべきわざを忠実に、また勤勉に行ってまいりたいと思わされます。

8月13日(水) マルコの福音書14章1、2節

彼らは、「祭りの間はやめておこう。民が騒ぎを起こすといけない」と話していた。(2節)

マタイの福音書によりますと「そのころ、祭司長たちや民の長老たちはカヤパという大祭司の邸宅に集まり、イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。」(26章3、4節)とあります。ですからカヤパが首謀者として非公式に議会が召集され、イエス様を殺すための相談がなされました。彼らはイエス様をだまして捕らえなければならないと考えるほど、イエス様の言

行に関しては合法的に訴えることはできないと認めたのです。そして彼らは、「イエスをだまして捕らえ、殺すための良い方法を探して」（1節）いました。いろいろ策をめぐらしていたのでしょう。しかしイエス様は弟子たちに「あなたがたも知っているとおりに、二日たつと過ぎ越しの祭りになります。そして、人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」（マタイの福音書26章2節）と言われました。つまりイエス様はご自分が十字架につけられるために引き渡されますが、それは父なる神様のみこころであると知っていました。人はそれぞれ心にさまざまな計画や考えを持ちながら、それを実行するためにいろいろと策をめぐらしますが、最後には主のみこころだけがなるのです。

一方で彼らは「祭りの間はやめておこう。民の間に騒ぎが起こるといけない。」と話していました。恐らくイエス様をメシヤと信じ、支持していた人たちもたくさんいたでしょうから、その人々の反応を恐れたのでしょう。また逆に群衆を怒らせることで、自分たちが人々からの支持がなくなってしまうことも心配したのでしょう。彼らは神は恐れませんでした。人は恐れたのです。「人を恐れると罫にかかる。しかし、主に信頼する者は高い所にかくまわれる。」（箴言29章25節）とありますように、私たちは人の顔色をうかがい始めると、必ず主のみこころに反する行動をとってしまいがちになります。私たちは人を恐れるあまり、主のみこころをないがしろにすることはありませんか。人よりも主を恐れつつ、どんな中にあっても主が守ってくださることを信じて勇気をもって行動していますか。

8月14日（木）マルコの福音書14章3～9節

「彼女を、するまみにさせておきなさい。なぜ困らせるのですか。わたしのために、良いことをしてくれたのです。」（6節）

ナルド油とは、ヒマラヤ原産で、シルクロードを通して運ばれてきたものですから、非常に高価なものでした。実際にこの女が持ってきたのは「非常に高価なナルド油の入った石膏のつぼ」と言われています。弟子たちが「この香油なら、三百デナリ以上に売れて」（5節）と言っていますが、三百デナリは、労働者の平均賃金の約一年分にあたる額ですから、確かに高価なものでした。そのような高価な香油をこの女はイエス様のために惜しげもなく注ぎました。イエス様のためなら、どんなに高価な香油も惜しくないと思ったのでしょうか。イエス様は私たちのために十字架への道を歩まれ、いのちまでもお捨てになりました。それほどの犠牲を私たちが罪から贖うために払ってくださったイエス様に対して、私たちが犠牲を払っても払いすぎる

ということはないのです。ジョウエットという人が「犠牲の福音は犠牲の使者を要する。」と言いました。イエス様が求めているのは、イエス様のために喜んで犠牲をささげきる人です。私たちはイエス様のために犠牲をささげるキリスト者でしょうか。

この女はイエス様の死の予告に対して、それを感じ取りイエス様に香油を注いだのでしょう。一方で弟子たちはイエス様が語られることを全く悟ることがありませんでした。ですから「何人かの者が憤慨して互いに言った」（４節）とあります。これは、かんしゃくを起こしながら憤ったということです。「何のために香油を無駄にしたのか。」と、イエス様のために用いた香油を無駄だと言ったのです。「この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人に施しができたのに」と、この女を厳しく責めました。しかし、イエス様は、この女の側に立ち、弁護してくださいました。イエス様は、すべてを分ってくださった上で、私たちの側に立っていてくださいます。神様のためにしたことを他の人から理解されないこともあるでしょう。それが未信者ではなく、教会の兄弟姉妹からも理解されないこともあります。しかしもし私たちが神様のためにしたことであれば、イエス様がわかっていてくださり、知ってくださっているのです。それで十分です。この女に対しても「わたしのために良いことをしてくれたのです。」（６節）と言われました。それと同じように、私たちがイエス様のためにしたことに対しても、「わたしのために、良いことをしてくれたのです。」と言ってくださいます。そのことが私たちに対する最高の報いではありませんか。また、私たちは人と比べたり、人を見る必要はありません。「彼女は、自分にできることをしてくれました。」（８節）とイエス様は言われました。弟子たちにも同じように三百デナリ以上に売れる価値のある香油を注ぐことは求められませんでした。私たちは、自分にできることをイエス様のためにするならば、イエス様は、それを喜んで受け入れてくださるのです。

8月15日（金）マルコの福音書14章10、11節

「さて、十二人の一人であるイスカリオテ・ユダは、祭司長のところへ行った。イエスを引き渡すためであった。」（10節）

ユダという人物について聖書からいくつかのことを知ることができます。まず彼がカリオテの出身であるということです。イスカリオテというのは、カリオテの人という意味です。他の弟子たちが、皆ガリラヤ人であったと考えられる中で、彼だけがユダヤ人でした。さらに、彼はイエス様に選ばれて使徒となり、三年の間イエス様と寝食をともにし、イエスの教えをいつも

聞かされ、その数々の奇跡を目撃してきました。何よりも、彼は金入れを預かっていました（ヨハネの福音書13章29節参照）それだけ信頼されていたのでしろうし、弟子の中には、取税人であったマタイがいたにもかかわらず、金入れを預かっていたというのは、それだけすぐれた能力を持っていたとも考えられます。

このユダがイエス様を裏切ったことに関して、多くの人々がさまざまな推測をしています。その中であって聖書がはっきりと言っていることは、彼が「イエスを売ろうとした」ということです。11節では議会側がユダの申し出に対して喜んで金をやろうと約束したとあります。マタイ26章15節を見ますと、金とは銀貨三十枚のことであり、それを彼に支払ったと記されています。なぜ銀貨三十枚なのかということですが、出エジプト記21章32節を見ますと、牛によって突き殺された奴隷に支払われる賠償額と同じ値段でした。（注：ここには三十シェケルと記されてありますが、一シェケルは11.4グラムで、シェケルは銀の重さの基本単位です。新改訳2017版 巻末の度量衡と通貨の票を参照のこと。）つまりイエス様は奴隷に等しい存在とみなされ、議会に引き渡されたのです。

女は三百デナリの香油をイエス様に注ぎ、議会は三十枚の銀貨を渡すことをユダに約束しました。この違いは、イエス様をどのように見ているかということにおける違いとも言えます。昨日も書きましたが、イエス様に対してどんな犠牲を払っても惜しくはないと思うか、犠牲を払うことに躊躇するか、もしくは最後までイエス様に従うか、ユダのようにイエス様を裏切り、捨て去るようなことをするかは、私たちがイエス様をどのような方として見ているかによって変わってまいります。私たちににとってイエス様はどのような方なのでしょう。

8月16日（土）マルコの福音書14章12～21節

「人の子は、自分について書かれているとおり、去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったのです。」（21節）

「種なしパンの祭りの最初の日、すなわち、過越の小羊を屠る日」に、「過ぎ越しの食事ができるように、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。」と尋ねる弟子たちに、イエス様は弟子たち二人を遣わし、どのようにすべきかを示します。「弟子たちが出かけて行って、都に入ると、イエスが彼らに言われたとおりであった。」（16節）とありますように、弟子たちが心配する前にイエス様は前もってすべてのことを整えておられたのです。私たちは、大きなことから小さなことまで、いろいろなことを心配しますが、すべてを主は整えてくださり、何も

心配しないでよいことを信じましょう。

そして、弟子たちが席に着いて、食事をしているとき「まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ります。」と衝撃の事実を語られました。「まさか私ではないでしょう。」と次々にイエスに言い始めた弟子たちに対して「十二人の一人で、わたしと一緒に手を鉢に浸している者です。」と言われました。そしてその後で「人の子は、自分について書かれているとおりに、去って行きます。」と言われ、「自分について書かれているとおりに」つまり神様のご計画通りに十字架につけられ、三日目によみがえられ、天に昇られることを言おうとしています。このようにして、イエス様に対する預言が成就することを言おうとしています。ユダに対しては「しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は生まれて来なければよかったのです。」と辛辣なのろいの言葉が語られています。ユダの裏切りは、神様の人類の救いのご計画を成し遂げるために用いられましたが、だからと言ってユダのしたことが無罪放免にはなりません。ユダはイエス様の弟子という立場であり、イエス様とともに過越の食事にあずかる恵みが与えられているので、イエス様を裏切るという行為に対してはより重い責任がありました。そのユダに対しても、イエス様はさまざまなかたちで悔い改めの機会を与えていたはず。この過ぎ越しの食事の時ユダは謙遜に自らの罪と向き合うことで、最後の悔い改めの機会とすることができたはずですが、ユダは最後の最後まで心をかたくなにして悔い改めることをしませんでした。それゆえに彼の罪はそのまま残ることとなったのです。

8月17日（日）マルコの福音書14章22節

「さて、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしのからだです。」（22節）

最後の晩餐の記事は、非常に簡潔にまとめられていますので、当時の過ぎ越しの食事がどのようなにされたかを少し説明したいと思います。過越の食事は、四杯のぶどう酒を基準に進められます。

第一の杯（聖別の杯）が、家長の祝福のこととともに回される。エジプトでの苦役の思い出としての苦菜が配られる。最初の杯を飲み、手を洗ってから、苦菜を塩水に浸して食べる。

種なしパンと、れんが色のスープと焼いた過ぎ越しの子羊が出される。（→神がご自分の民を苦しみから解放してくださった救いの恵みを記念するものでした。）

家長が祝福して、苦菜をスープにひたして食べる。一同も食べる。

第二の杯が注がれ（過去を覚えるため）、最年少者が儀式の由来を質問し、（なぜこの夜に種を入れないパンを食べるのか、苦菜を食べるのか、苦菜を塩水に二度浸して食べるのか、なぜ斜めに横たわって食事をするのか）家長が過ぎ越しの意義を教える。（→恥辱から始めて栄光で終わる歴史を語り、申命記26：5以下を説明します。）

小ハレル（詩篇113篇、114篇）が詠唱され、賛美、祈祷の後、第二の杯が飲み干される。

第三の杯が準備される。（現在を祝福するため）家長が手を洗い、パンを取って裂き、祝福して食べる。（→聖餐の制定はこの場面から始まった。）

一同が食事を始める。

家長が最後の子羊の肉切れを食べ終わると、第三の杯が回される。

大ハレル（詩篇115～118篇）が詠唱され、第四の杯（未来を祝福するため）が回され、ハレルの結び（詩篇120～137篇）を詠唱しながら、食事が終わる。

聖餐式が「パン裂き」と呼ばれますが、裂くという行為は、まさにイエスのからだが砕かれるような苦痛を意味しています。そしてパンを「これはわたしのからだです。」と言われて与えたのは、ご自分を与えることによって弟子たちを生かすことを意味していたと考えられます。なぜイエス様をご自身をパンで表現されたのでしょうか。その問いに対して私たちは、四福音書すべてに報告されている「五千人の給食」（マタイ14：13～21；マルコ6：30～44；ルカ9：10～17；ヨハネ6：1～14）を思い出すことができます。神は荒野でマナを与えることで、イスラエルの民を生かし養われたように、イエスがいのちを与えることで、人のいのちを養われる方であることを示しています。そう考えますと、この晩餐の場では、先ほども申しあげましたように、自分自身をパンになぞらえつつ、パンではなく自らを与えることで、いのちとその養いをもたらすという真理が明らかにされたのです。そしてイエス様は、弟子たちだけでなく私たちにもご自身を与えてくださいました。そして聖餐式において割かれたパンを受け取る時に、私たちは主イエス様が、ご自分のからだを砕かれる苦痛を受けつつも、ご自分を与えることにより、私たちにいのちの養いをもたらす方であることをおぼえることができるのです。

8月18日（月）マルコの福音書14章23～24節

「これは多くの人のために流される、わたしの契約の血です。」（24節）

イエス様は再び杯をとって感謝の祈りをささげました。それは現在を祝福をする杯と呼ばれる第三の杯で、「汝、我らの神である主、世界の王はほむべきかな。汝は、ぶどうの実を造り・・・」との言葉で始まります。その祈りの後か途中で、杯に関する言葉が語られたのではないかと思われまます。

23節を見ますと「杯を取り」「彼らはみなその杯から飲んだ。」と杯にその注意が向けられています。杯は、しばしば罪に対して神がくだされる怒りのさばきを象徴しています。(詩篇75:8; イザヤ書51:17参照) それとともに主の救いの豊かさをも表します。(詩篇23:5; 詩篇116:13参照) そう考えますと、ここでの杯は、十字架で私たちに代わって神の怒りの杯が象徴する神のさばきを受けることを現すと同時に、私たちに救いをもたすイエスの贖罪のみわざをも表していると言えます。そして「彼らはみなその杯から飲んだ」とありますが、これは一つの杯から弟子たちが飲んだということを意味しています。私どもも聖餐式において杯を受け取りますが、その時に自分にも恵みとしての救いが与えられ、兄弟姉妹と一つとされ、ともに聖餐の恵みにあずかることができたことを主に深く感謝させていただきます。

イエス様は弟子たちに杯を渡す際、「これはわたしの契約の血です。」と言われました。血はいのちであると言われていますが、(レビ記17章11節; 申命記12章23節など) ぶどう酒の杯を「わたしの血」と表現したことで、イエス様がご自分のいのちを与えようとしていたことが分かります。しかも「多くの人のために流される」と言われていますが、「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」(10章45節)を思い出させます。それは、まさにユダヤ人だけではなく、異邦人も含めて罪人の贖いの代価としてご自分のいのちを犠牲にされるイエス様の十字架の姿があります。また、「契約の血」とありますが、出エジプト記24章8節に「主があなたがたと結ばれる契約の血である」とありますが、契約を結ぶ際には血が必要であったということで、私たちが父なる神様と契約を交わすためにイエス様が十字架の上で血を流されたのです。イエス様は間もなく「罪を赦すために多くの人のために」血を流すこととなります。ご自分のいのちを犠牲にすることによって人々と神との和解がもたらされようとしています。その和解をいただいた者たちが、聖餐を通して心から神に感謝をし、神との交わりの祝福を喜び楽しむ機会となることも期待されているように思います。

私たちは毎月第一週目に聖餐の恵みにあずかることが許されています。何となく聖餐を受けるのではなく、その背後には主イエス様が十字架の上で流された血があることをおぼえ、与えられた救いに感謝するとともに、イエス様の血による契約を通して神様との祝福された交わりに入れられたことを感謝する時ともさせていただきます。そして、私のような者にも救いの恵みが及んだことにも心から感謝しましょう。

8月19日（火）マルコの福音書14：25

「まことに、あなたがたに言います。神の国で新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、もはや決してありません。」（25節）

この25節で言われている言葉でイエス様は別れの時が来たことを婉曲的に知らせています。ですから、もはやイエス様が弟子たちとこのようなかたちで食事をしないということを言われているのでしょう。しかし、神の国の完成の時が来て、その時には神の民が集められ、ともに祝宴が開かれることが語られています。

ここに記されている神の国の完成時における喜びの祝宴に対する言及は、預言者たちが望み見ていたものでした。例えばイザヤ書25：6～9には「万軍の主はこの山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。この山の上で、万民の上をおおうべールを、万国の上にかぶさる覆いを取り除き、永久に死を呑み込まれる。神である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。主がそう語られたのだ。その日、人は言う。「見よ。この方こそ、待ち望んでいた私たちの神。私たちを救ってください。この方こそ、私たちが待ち望んでいた主。その御救いを楽しみ喜ぼう」と語られています。ここには救いの完成を喜ぶ宴会の様子が描かれています。またイエス様ご自身も「多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。」（マタイの福音書8章11節）と言われました。まさしく神の国の完成の時、みことばが成就して大きな喜びに満ちた祝宴が開かれるのです。そして今の時代を生きる私たちも毎月第一週目に定められた聖餐にあずかっていますが、まさに将来このような喜びあふれる祝宴に招かれることを期待し、待ち望みつつ聖餐のテーブルに着くことが期待されています。このような将来における希望が与えられていることに心から感謝しましょう。

8月20日（水）マルコの福音書14章26～31節

「しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」（28節）

イエス様と弟子たちは、食事の最後に歌う詩篇115篇以下のハレルの賛美を歌ってから、オリーブ山へと出かけて行かれました。目指すところはゲッセマネでした。

27節でイエス様は弟子たちに「あなたがたはみな、つまずきます。」と言われました。そし

てゼカリヤ書13章7節の預言を引用しながら、その確実さを裏付けたのです。しかし羊飼(メシヤ)が打たれることによって、羊が散り散りになるのは、群れを滅ぼすためではなく、そのような試練を通して「練りきよめる」ためでした。「銀を錬るように彼らを錬り、金を試すように彼らを試す。」ゼカリヤ書13章9節参照) イエス様は「しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」(28節)と言われ、よみがえられたイエス様のもと、もう一度弟子たちを集めようとしますが、それこそが「わたしは『これはわたしの民』と言ひ、彼らは『主はわたしの神』と言う。」(ゼカリヤ書13章9節)と預言されているような弟子たちの姿に変えられていくのです。そしてなぜイエス様が「ガリラヤへ行きます」と言われたのかということに関しては諸説ありますが、恐らく彼らはイエス様が十字架につけられた後、自分たちの地元に戻るだろうと思われたのでしようし、ガリラヤが彼らの信仰と召しの原点でしたので、そこに立ち返るという意味もあったことと思われま

す。「あなたがたはみな、つまずきます」とイエス様が言われたことに対してペテロは「たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません。」と言いました。そのペテロにはっきりとイエス様が「まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度泣く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」と言われたのに対して、それを強く否定するように、「たとえ、ご一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」と言いました。しかもペテロだけでなく、皆も同じように言ったのですが、結果は悲しいことにイエス様が言われたとおりになってしまったのです。

なぜこのようなことになってしまったのかということに関していくつかの理由が考えられます。まず第一の理由が、彼らが謙遜さを欠いていたことです。彼らはどこまでもイエス様に従っていかうと思っていた決心は嘘ではなかったと思います。しかし人間の弱さを自覚し、イエス様の警告に素直に耳を傾けることができなかつたので、大きな失敗をしてしまいました。二つ目が、彼らはイエス様の語られた警告や引用されたゼカリヤ書のみことばを軽く聞き流してしまったことです。もし彼らがイエス様に、語られた意味などを尋ねるなどしていれば、もう少し彼らのうちで心構えができたのではなかろうかと思ひます。私たちが日々主が語ってくださるみことばに素直に耳を傾けているでしょうか。そして謙遜になって悔い改めるべきところは悔い改めているでしょうか。決してみことばを聞き流すようなことのないようにいたしまし

8月21日(木) マルコの福音書14章32～42節

「誘惑に陥らないように、目を覚まし祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」

(38節)

イエス様と弟子たちはゲッセマネ（油しぼりの意）に来ました。恐らく弟子たちとイエス様はよくここに来て祈っていたのでしょう。ですからユダもイエス様のおられる場所を容易に突き止めて、イエス様を引き渡すことができたのです。

イエス様は弟子たちに「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい。」と言われると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて、さらに奥へと進んで行かれました。そのとき、「イエスは深く悩み、もだえ始め」（33節）られたのです。そして、この三人に「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」（34節）と言われ残されてイエス様はさらに地面にひれ伏して祈られました。その距離は「石を投げて届くほど」（ルカの福音書22章41節）でしたので、この三人にはイエス様の祈っている姿がよく見えたはずですが、イエス様の深く悩み、もだえ始める様子や「苦しみもだえて」「汗が血のしずくのように落ちる」のも見えたはずですが、それにもかかわらずイエス様が戻ってみると、彼らが眠っているのを見つけました。その弟子たちに対してイエス様は「霊は燃えていても肉は弱いのです。」と言われました。彼らは文字通りの意味で肉体が弱かったとは思えません。彼らは漁師でしたので、夜通し漁をすることもありましたし、嵐のガリラヤ湖を夜通し船を漕ぎ続けるだけの体力はありました。恐らく彼らはさまざまなことに忙殺されて一時間祈るだけの体力が残っていなかったのです。私たちも祈れないほど肉体の弱いという人はいないでしょう。しかし日々の生活の中でさまざまなことに忙しすぎて、最後には疲れて眠気がさして祈れないということがあつたのではないのでしょうか。ある人が祈れないほど忙し過ぎてはならないと言いましたが、私たちは忙しい日常の中にあつても、どこかで祈りの時を確保するようにしなければなりません。朝が難しければ夜に祈るとか、夜は眠ければ朝早めに起きるなどの工夫も必要でしょう。

さらにイエス様は「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。」と言われました。誘惑に陥らないように私たちは祈らなければならないのです。例えば悪魔はユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れましたが、まさにユダはその誘惑に陥ってしまいました。「サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。」（ルカの福音書22章31節）とありますように、信仰の試練がいつやってくるか分かりませんし、そのような時に祈っていなければ私たちは容易に負けてしまいます。自分はだいたいようぶなどと思う人がいたなら、弟子たちがイエス様を見捨てて逃げて行ってしまったり、ペテロがイエス様を

三度知らないと言ったことなどを思い出すべきです。人がいかに弱い存在であるかということをおぼえて、私たちは誘惑に陥らないようにどこかで時間を取って祈り続けなければなりません。

8月22日(金) マルコの福音書14章32～42節

「アバ、父よ。あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」
(36節)

イエス様が十字架にかけられるということは、激しい恐れを引き起こすものでした。「深く悩み、もだえ始め」(33節)とあり、弟子たちにも「わたしは悲しみのあまり死ぬほどもです。」とされました。それにはいくつかの理由が考えられますが、まず一つは罪を知らない方が人類の罪をその身に負い、神の怒りをお受けになるということでした。(注:「杯」(36節)が神の怒りと審判を表している。) もう一つが永遠から永遠まで存在しておられ、決して死を味わわれるはずのない神の御子であるイエス様が死を経験されるということでした。

イエス様は「アバ、父よ。あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。」と祈られました。イエス様は正直にご自身のお気持ちを表現されています。父なる神は何でもおできになると告白しつつ、この杯をわたしから取り去ってくださいと祈ります。それができるはずだからということでした。しかし「わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」と祈られました。私たちは、神が全能の神だと教えられていて、事実神は全能なるお方であり、私たちもそのことを信じています。そして、私たちもイエス様のように「あなたは何でもおできになります。」と、心から信じ、そして自分の願い事を神に伝えます。病が癒されるように、仕事が与えられるように、将来の導きのためなどなど…。そこに見え隠れするのは、何でもおできになる父なる神が私の望むことを行ってくださるはずだとの思いであり、全能である父なる神を利用しようと考える私たちの浅ましい考えです。私たちもどこかで自分の心からの願いとして、「あなたがお望みになることが行われますように」と祈れる者へと変えられたいと思わされます。そのためには必ず主なる神様はすべてのことを最善にしてくださると信じることのできる信仰が与えられることを願います。事実、十字架は史上最悪の極刑と言われていましたが、それを父なる神は人類を救うための手段とすることにより、最悪のものを最善のものへと変えてくださったのです。状況がどうなったとしても、自

分の望むことではなかったとしても、主はすべてを最善にしてご自分の栄光を現してくださると信じる信仰が与えられる時に、私たちがイエス様のように「わたしの望むことではなく、あなたが望みになることが行われますように」と祈ることができるようにされます。

41節でイエス様は「時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。」と言われました。イエス様は、自らが十字架にかかれることが父なる神様の望まれていることであると確信するとともに、自分が引き渡される時が来たことを知られました。それと同時に、イエス様の願われたことは、「この杯をわたしから取り去ってください。」との思いをもって十字架にかかれるのではなく、むしろ従順にみこころに従う中で、父なる神が与えようとしておられた杯を飲み干されることでした。実際にイエス様は父なる神様のみこころに従順に従われることを通して、従順を学ばれました。「キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び」とあるとおりです。(ヘブル人への手紙5章8節) 御子イエス様がそのようにして様々な苦しみを通して従順を学ばれたのであれば、私たちはどれほど人生の様々な苦しみを通して父なる神への従順を訓練されなければならないことでしょうか。実際に私たちが人生の様々な苦しみを通して従順を学ぶことができるのです。それとともに、神様は信じて従う者を決して見捨てられるお方ではありません。そのことを信じて、イエス様を模範として様々な苦しみの中でも従順に父なる神様のみこころに従う者でありたいと願われます。

8月23日(土) マルコの福音書14章43～52節

「わたしは毎日、宮であなたがたと一緒にいて教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえませんでした。しかし、こうなったのは聖書のことばが成就するためです。」(49節)

イエス様は、ユダが祭司長たち、律法学者たち、長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした群衆とともに近くに来ていることを悟られ、「わたしを裏切る者が近くに来ています。」と言われましたが、すぐにユダが現れました。あたりは真っ暗でしたでしょうし、人違いをすることなく、イエスを捕えるために前もって合図を決めていました。それはイエスに対する口づけであり、ユダはイエスに対する尊敬と愛情の証しである口づけをイエスを捕えるための合図に用いたのです。イエス様は、自分を捕えに来た者たちに向かって「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕えに来たのですか。」と言います。つまり、イエス様をまるで強盗の仲間のように考えて、武力をも辞さないかのようにしてイエス様に向かって来ていると言うのですが、このことは、もしかするとイエス様を強盗のような凶悪犯に仕立てあげようと

いう策略があったとも考えられます。もしかすると暴動や反乱の首謀者にでもでっちあげようとしたのかもしれませんが、そのようにしてイエス様を犯罪者として捕えようとの意図があったのかもしれませんが。しかし十字架におかかりになることを父なる神のみこころと確信していたイエス様にとっては、人々の態度や策略は全く関係ありませんでした。ただイエス様は抵抗されることなく、ひたすら十字架への道を歩んで行かれたのです。そして「わたしは毎日、宮であなたがたと一緒にいて教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえませんでした。」と言われました。そのように言われることでご自身の身の潔白を明らかにしておられます。イエス様は、ゲッセマネの暗やみで大捕り物をしなければならないような神出鬼没なことをしていませんでした。もし、イエス様に何か罪や過ちがあったなら、それを指摘していつでも捕らえることができたはずでした。結局、ユダヤ人たちはその教えの中に、また論争の中にイエス様の誤りを見い出すことができませんでしたし、逆に祭司長たち、律法学者たち、長老たちは群衆を恐れて、イエス様を捕えることができなかったのです。

イエス様は「しかし、こうなったのは聖書のことばが成就するためです。」と言われました。これが聖書のどの箇所かは明言されていませんが、恐らくイエス様の心の中にあったのは、ゼカリヤ書13章7節のみことばだったのでしょうか。まさに14章27節でイエス様が上記のゼカリヤ書13章7節のみことばを引用しながら語られたとおりに、弟子たちはイエス様を見捨てて逃げてしまいました。しかしこのようなかたちで聖書のことばが成就しましたが、ゼカリヤ書13章9節の「わたしは『これはわたしの民』と言い、彼らは『主はわたしの神』と言う」とのみことばも成就し、イエス様を見捨てて逃げてしまった弟子たちの信仰の回復も成就することになります。弱い、肉なる者である私たちは、イエス様の弟子たちと同じように様々な失敗をしますが、聖書のことばは常に私たちの罪の赦しからの回復を約束していただきます。そのことを信じましょう。